

平成 29 年度 多様な新ニーズに対応する 「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン インテンシブコースセミナー

日 時: 2017 年 12 月 14 日(木) 14:00~18:00

場 所: 兵庫県立大学 明石看護キャンパス 406 演習室

テーマ: 「がん患者との対話とケアリング」

講 師: 内田 恵先生 (兵庫県立加古川医療センター)

受講者: 9 名

アンケート回収: 7 名 (回収率 77.8%)

主 催: 兵庫県立大学看護学研究科 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン代表 内布敦子

<概要>

兵庫県立加古川医療センターの内田恵がん看護専門看護師より、「がん患者との対話とケアリング」と題した講演でした。内容としては、がん患者との対話の現状が示され臨床現場で対話がケアとして成り立っている場面が紹介されました。また、先行研究として国内外の対話に関する文献の推移、焦点のあたっている内容が報告され、対話の本質に迫った研究はほとんどみられないことが示されました。

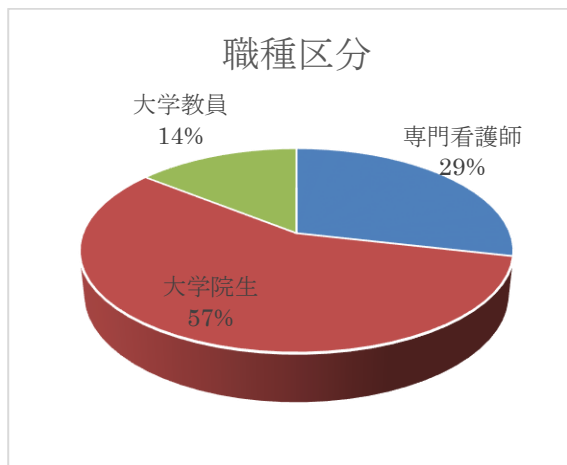
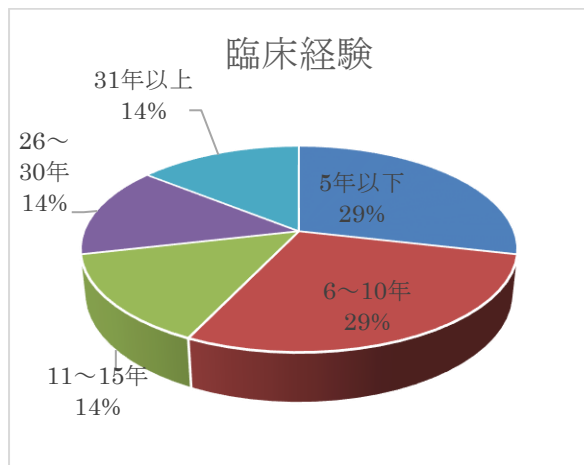
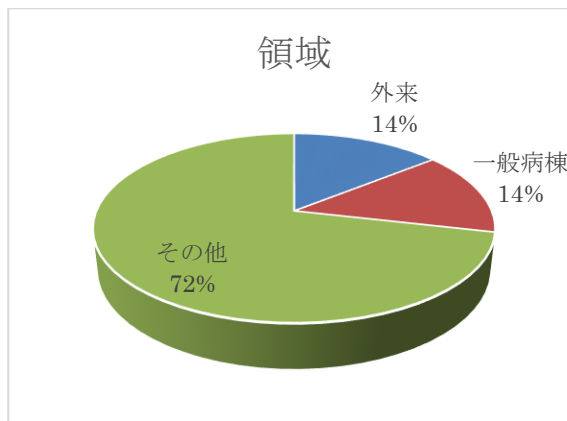
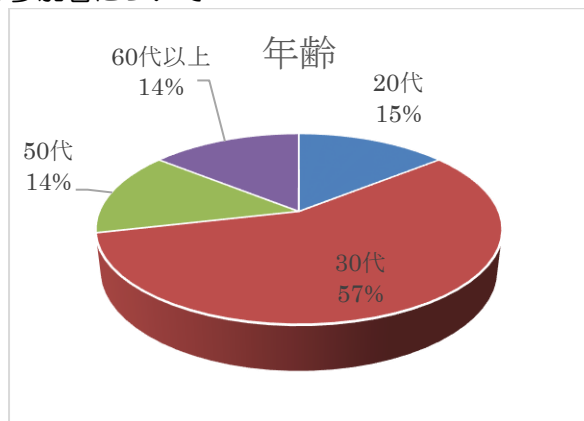
看護における「対話」に関する文献レビューをもとに、定義や概念分析の結果についても概説していただき、「がん領域における看護師と患者との対話」に関する研究の今後の可能性や方向を示していただきました。

講演後半は、参加者間で実臨床における対話の場面についてディスカッションが行われました。今回のアンケートの全ての回答に「非常に役に立つと思う」とコメントをいただくことができました。



<アンケート結果>

●参加者について



●参加者からのコメントより

▼感じたこと、印象に残ったこと

- ・対話の概念分析の検討のところでディスカッションをしてより概念が明確になりました。
- ・対話をもたらすポジティブな効果についてとても印象に残りました。
- ・日常にあるだろう対話について、会話やコミュニケーションとは異なる「対話」の本質に迫るため、多方面からの視点を学ぶことができた。臨床でおこっている一方向の指導や教育場面を課題に感じていたので、「対話」として考える貴重な機会となった。
- ・ディスカッションを通して、理解が深まりました。
- ・何気なくやっている対話を意図的にケアとして行うことを追求すると自分の看護感を見直す機会になりました。
- ・ケアとしての対話を臨床のNsがどのように語られるのか興味深く感じました。最後のディスカッションでは、改めて自分たちは自分たちを道具にしてケアしているので一人の人間としての価値観や他者へのせまり方が重要なツールと感じた。
- ・対話の概念分析

▼がん看護において感じている課題

- ・がん看護に限らず、全ての病棟（病院）看護で患者との対話が少なくなっていると感じる。
- ・患者さんに興味を持つためには（Nsが）、症状を受け止める、キャッチするにはどんな方法があるか、課題に思っています。
- ・患者さんがよくわかった上で治療を受けているか疑問である。治療することが、治療を受けることが目的になってしまっている。

▼今後セミナーで取り上げて欲しいテーマ

- ・意志決定支援
- ・認知機能が低下した患者の意志決定について、特に治療に関する意志決定について

▼その他

- ・どのように、研究を進めたらよいかイメージがつかえました。
- ・ディスカッションできる時間があるのは嬉しい。